
RED DIAMOND

m

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

RED DIAMOND

【Nコード】

N5564X

【作者名】

m

【あらすじ】

2020年、抗生物質に抵抗力のある新型の細菌がねずみに感染し、それから数年後には人への感染が始まった。50年後、人類はまだこの細菌を克服できずにいた。荒廃したこの世界で細菌処理を生業にしていたオレは、ある女性に出会い運命を変えられる。昔作ったゲームを小説にしてみました。小説はド素人なのでアドバイスや感想などいただけるとうれいす。

ブローグ

石には不思議な力がある。

身近な所ではクォーツ時計。

かつて主流であったゼンマイ式の機械時計に革命をもたらしたのは水晶だった。

水晶に電流を流すと非常に精度の高い一定の振動を繰り返す。

技術者はそれを時計に応用したのだ。

トルマリンによる疲労回復、リラックス効果も一般的に知られているだろうが、これは科学的にはその効力が不十分であるといわれている。

ただし、トルマリンの発する効果があと10、000倍強ければ人々の生活は一変するだろう。

ダイヤモンドは工業製品を加工するために不可欠であるし、オニキスはインチキ占い師の必需品だ。

話は変わるが、近年抗生物質の効かない細菌が発生し始めている事をみなさんは知っているだろうか。

今はまだ人類の脅威となるほどの新型の細菌は見つかっていないが、近い将来菌はどのような突然変異をするかわからない。

菌の歴史は突然変異の歴史なのだ。

これからお話するのは今から50年後の話。

新型の細菌がねずみに感染し、人類に脅威がおよんでいる世界での物語です。

人類はこの細菌に対し、ブラックスリカをはじめとする除菌効果を持つ石の力を応用し対抗しようとしています。

細菌と人類の戦いに終わりはあるのでしょうか。

「今日は紅葉エクスプレスのご利用ありがとうございます。これより移動売店が車内を巡回いたします。暖かいコーヒーやお弁当をご用意いたしておりますので、どうぞご利用お願い申し上げます」

特急列車の車内に上品な声のアナウンスが流れた。

「ねえ！ 売店が来るって！」

アナウンスの声より若干甲高い声を上げ、少女がオレの顔色をうかがった。

彼女はリシリ、オレの相棒だ。

「でっ、ていう……」

オレはワザと話に乗らないようにしてリシリにイジワルした。

「だから、売店がくるんだって！」

リシリは少しムツとしながら同じ言葉を繰り返した。

「わかった、わかった、なにか買えばいいんだろ。で、何が食べたいの？」

これ以上からかうと彼女は買った品物を独り占めしてしまうだろう。

いや、本当にやりかねない。

「うーん、アイスもいいし、お弁当もどんなのがあるのか見てみたいな」

「アイスねー、そういえばお腹が少し減ってきたな、まだあと2時間は列車に乗ったままだし今のうちに何か食べておくか」

空腹というほどではなかったが、駅で降りた後に駅弁よりもいい食事にありつけるかという不安もあった。

到着時刻が遅いせいもあるが、それよりもオレ達が住んでいる町が田舎であり、駅の周辺にもそれほど多くの店が無いための。

どんなお弁当があるだろう、という妄想の話をリシリとし始めて

10分ほど経ったころだろうか。

先ほどよりもあわてた感じのアナウンスが車内に流れた。

「お客様の中にお医者様はいらっしゃいますか？　いらっしゃいましたらご協力をお願いします」

「なにかあったのかな」

リシリが不安そうにこつちを見た。

「お医者様がいらっしゃいましたら1号車の医務室までお願いいたします」

周りに席を立つ人はいなかった。

「ねえマスター、行ってあげて」

リシリがオレに催促した。

「行かねーよ。オレ医者じゃないし」

「そんなこと言わないで、ひょっとしたら細菌に関係ある何かが原因かも」

「だって、めんどくさいもん」

昔と違って今では細菌によって命を落とす人が増えている。

毒性の強い細菌が増えてきているからだ。

そして患者が菌に感染してしまった場合、医者ではなく菌の専門家が治療にあたる場合が多い。

オレはその治療ができる。

ただしそれは、オレがその気になれば、の話だ。

オレはシートを少し倒し楽な姿勢をとった。

「わかった。じゃあ私が様子を見てくる。何かあったら呼ぶからね」
リシリは席を立って1号車の方へ歩いていった。

彼女が医務室に向かった後、オレは考え事をしていた。

もしも今アイツがいたとしたら、アイツはオレになんて言うだろう、と。

「ねえデュート、リシリに協力してあげて」
アイツの声が聴こえる。

夢であつても幻であつてもアイツの声が聴こえるのはうれしかった。

「しょーがねーな」

小さくつぶやきオレは席を立つた。

旧式の列車はカーブにさしかかると少し揺れる。

急いで行くほどの危機感を持つていなかったオレは、よろけないように手すりを使いながらゆっくりと1号車に向かった。

医務室に入ると患者とおぼしき人物が横になっていた。

周囲にはリシリを含めた数人の人と、かたわらには医療器具を広げた医者がすでに患者の様子をうかがっていた。

「ごめんなさい。この方はsh-32型に感染してしまっています。今私がついている医療器具ではこの方を助けることは……」

sh-32型、人間とねずみにだけ感染する病原菌で、感染するとねずみの場合は凶暴性が増すだけだが人間の場合は死に至る。

感染力が強い訳ではないが抗生物質の効かないこの菌は、身近な生き物であるネズミ類が保持者となっていることもあり常に感染の危険がある。

現在ではこのsh-32型は人類の死亡原因第一位なのだ。

女医は周りに聞こえる程度のしずんだ声で病状を説明すると、検査紙を持ったまま目を伏せた。

彼女の説明が終わると、ドアの開閉の音に気がついたのかリシリがこつちを振り返った。

「マスター」

オレは患者に向かって歩を進めながら言った。

「32型か、見させてもらうぞ」

女医から検査紙を取り上げて目を通したあと、患者のシャツのボタンを引きちぎって上半身を露出させた。

意識はなかったが、目の色や皮膚の状態から事態はそれほど深刻でないことがわかった。

「リシリ、菌の洗浄をするぞ」

「はい！」

リシリはオレのカバンを開けながら患者の状態を説明する。

「42歳男性体重は70キロ血液型はO、合併症の症状はありません」

「エメラルドを60と20、10、10、12gだ」

石の処方告げた。

「エメラルドを60に、ピレスロイドを20、レスメトリンを10、増強剤を10、12g了解しました」

リシリは優秀な助手だ。

一度術式が始まると普段の気難しさは影をひそめ、石使いに絶対の服従をする。

「マスター、石粉せきふんです」

「よし」

オレは差し出された石粉を口に含み水筒の水で体内に流し込んだ。
「静脈注射で十分だろう、リシリ、後は頼む」

オレは方ヒザをついたままシャツの胸ボタンを開け、精神を石の効果の増幅に集中した。

リシリはオレの左胸に埋め込まれた凹型端子に小型精製機から伸びたプラグを接続した。

そう、オレの左胸には端子が埋め込まれている。

体外の機器と接続するためだ。

石粉が溶け始めオレ自身に幻覚や腕の振るえの症状が現れはじめた。

なぜオレがこんな目にあわなければならないのか。

それは、石粉から血清を作れるのが、ごく一部の特殊な抗体を持つた人間だけだからだ。

『sh-32型』に感染した患者を治療するためにはオレのような人間が必要になる。

オレは自分の抗体が憎らしかった。

リシリは血清が出来上がるのを待っている。

やがて、オレの体内で免疫が出来上がると血液は心臓からプラグを通して血清精製機に送られる。

そこで精製された血清は、その効力が失われる数分以内に患者に投与されなければならない。

血清の保存ができないのがsh-32型が脅威となっている理由だ。

リシリは完成した血清を患者に注射すると、オレに中和剤と水筒を手渡した。

「お疲れ様です。マスター」

少しもうるうとした意識の中で彼女の言葉が心に響く。

「あなた石使いね！」

女医が目を見開いてこっちを向いていた。

「ああ、だったらなんだよ」

中和剤がまだ効いていなかったので返答するのも億劫おっくうだった。

「助かりました。ありがとうございます」

患者の変わりに礼を言っているつもりだろうか。

「治療費はお前が持ってきた」

金のことなどどうでもよかったが、少しばかりこの女医に八つ当たりがしたかった。

依頼

女医の名前は麻耶。

あの日以来たまに家にメシを食いに来るようになっていた。どうやらリシリが彼女を家に招いているらしい。

兄弟の居ないリシリは麻耶を姉のように慕っているようだ。一人っ子というのは近頃では珍しい。

細菌による死亡率が上がると、それに比例するかのようにな出生率が上がったからだ。

今では女性一人当たりの出生率は4人を超えている。

平均寿命に関しては成人を待たずに死亡する人の数が増加したことにより50歳前後となっていた。

弱い種は多くの子孫を作り、強い種は子供を多く産まない。

自然の摂理だと言われているが、だとすると人類は種として弱体化してきているのかもしれない。

オレの感じたかぎりでは、この病気が流行してからは人は死に対する認識が変化してきているように思える。

昔と比べ身近な人の死を容易く受け入れられるようになってきている、というような気がするのだ。

「ねえ聞いてる？ いいでしょ？」

麻耶は遠慮もなくシチューをすすりながら言った。

「あなた達の力が必要なのだ」

麻耶はすっかりキレイに舐めあげたスプーンでこっちを指差した。
「お、このジャガイモ硬さが丁度いいな。ニンジンも大きく切ってあつて食べ応えがあるし」

オレにとつては麻耶の話よりもシチューの味の方が重要だった。

「まだ、おかわりあるからね」

リシリがうれしそうに言った。

「あの森を抜けられれば、ものすごく時間が短縮できるのよ」
麻耶がまた話を戻そうとした。

オレは座右の銘の一つを発動することにした。

「だってオレ忙しいし」

リシリが横目でオレを見ながら口先を尖らせた。

「ダラダラするのに忙しいんでしょ？」

「そう、ダラダラ……って、違うし！ 大人には色々やる事があるの。RPG作ったりとか、小説書いたりとか……」

「それ、全部子供もやってるよ」

リシリの視線はもうシチューの方へ移っていた。

麻耶は顔を傾け鼻の前で指を組んだ。

「ねえ、お願い」

色気を出すつもりなら、もう少し上目づかいになった方がいいだろう。

「デュートが護衛をしてくれないと私あの森を通れないの」

こいつは当たり前前の事を当たり前前に言う天才か。

「もう分かった。考えとくよ」

面倒くさくなってくるとオレは決まってこう言う。

考えとくと言った後で、オレはアイツだったらどうするだろうと考える。

アイツならきつと麻耶の護衛を買って出るだろう。

今のオレにとって重要なのは目の前のシチューをおいしくいただく事だけだった。

「うふふ。お願いね」

挑発的な麻耶の笑顔が少しだけ可愛く見えた。

『next』

森や草原に住む野鼠達は人間の脅威となっていた。

感染した野鼠は凶暴性が増し、集団で民家を襲うことがあるからだ。

たとえるなら、熊が大量発生した場合と似ているかもしれない。

山間部などの地方に住む人々は、被害を避けるため都市部への移住を余儀なくされた。

人の住まなくなった村の末路は悲惨なものだ。

変化をもたらしたのは植物だった。

植物の力は偉大だ。

木の根はアスファルトの道路を軽々と破壊し、ツルは建造物に巻きつきそれらを支柱の一つにしてしまう。

人々に放置された多くの宿場町は数十年が経過する間にすっかりその姿を変えてしまった。

交通網が破壊され気軽に遠出をしなくなった人類は、町から町へ移動するためには非常に高額になってしまった公共交通手段を使うか、

さもなければ危険を冒して徒歩で進むくらいしか選択肢がなくなってしまった。

ルート20は以前は首都へ通じる道として多くの人が車を走らせていた道だ。

今は森林化が進み列車も通らなくなってしまったが、オレ達が住んでいる町から首都に向かうためには依然としてここを通るのが一番の近道だった。

オレ達3人は麻耶の依頼を受け、このR20の森に足を踏み入れている。

「あ！ ネズミ！」

「キヒヤッ！」

麻耶がリシリの足を葉っぱの生い茂った枝でガサガサと撫でた。

「リシリってかわいい〜」

（お前はカワイくないけどな）オレは言葉には出さなかった。

「ねえデュート、今どの辺？ 森の半分は超えた？ 私もう足が棒だよ？」

森の中は日差しこそ十分に差し込んでいたが、足場も悪く進んだ距離の割には疲労が大きい。

「あと1時間くらいじゃないか？」

麻耶が肩を落として立ち止まった。

「えゝ、さっきも一時間で言ってたじゃない。あれからもう30分位は経ったよ。ちつとも進んでないってこと？ ねえ？」

あとどの位で森を抜けるかなどオレを含め誰にもわからなかった。

「ねえマスター、私休憩したい」

リシリも立ち止まってしまった。

男のオレですら足がガクガクだ。女の脚力じゃあなおさらだろう。

「少し休憩するか」

オレは彼女達の所へ少し引き返し、着火剤に火をつけて焚き火を起こした。

「あそこの溪流で手を洗って来い。軽く何か食べよう」

しゃがみ込んでリュックの中の食料をあさっている時だった。

「マ、マスター」

溪流の方からリシリの悲鳴が聞こえた。

急いでリシリの元へ駆けつけると1匹のネズミがこちらの様子を伺っている。

偵察のネズミだろう。

近辺にはおそらく数百匹の本体がいるに違いない。

だが、あせる必要はなかった。

「ちつ、見つかったか。リシリ、『next』だ」
「はいっ」

リシリがバックを取りに戻ろうと後ろを振り返ると、麻耶がそのバックを持って後ろに立っていた。

「あなた達の『next』見させていただくわ」

麻耶はリシリにバックを手渡した。

感染した森ネズミは群れで行動することが多い。

遭遇率は高くないが、もしも運悪く見つかったら少しぐらいの防護服は着ていても役には立たない。

凶暴性と俊敏性が増した数百のネズミに襲われれば、厚手の布など有って無いようなものだ。

オレ達が軽装のまま森に入ったのには勝算があるからだ。

『next technology』通称ネクスト

石使いが血清を作る技術を応用したワザだ。

通常細菌を殺す程度の血清を作るのには一人で十分だが、これを二人の石使いが血流を同じくして行うことにより、さらに強力な成分を抽出することができる。

これをネズミに注入すればsh-32型だけでなく対象の細胞組織自体をも破壊する事ができる。

菌だけでなく細胞を血清で破壊することのメリットは、集団行動するネズミの一匹を消滅させることにより、

かなりの広範囲にいるネズミ達をしばらくの間退散させられるところにある。

ネズミ達は多分遺伝子レベルで恐怖を感じるのだろう。

「さてと……リシリ、通常の調査でいくぞ」

「了解です。マスター」

リシリが真剣な顔つきになった。

オレは懐から麻酔銃ふしじろをとりだし偵察ネズミに向かって発射した。オレのガンの腕はなかなかのものだ。

アメリカの西部開拓時代に生まれていたら結構な有名人になって

いたかもしれない。

リシリとオレは石粉を飲み込み心臓同士をプラグで接続した。
リシリの血液がオレに流れ込んでくるのがわかる。

「具合が悪くなったら言うんだぞ。リシリ」

「はい、マスター」

リシリがコクリとうなずいた。

石の能力を引き出す作業は、声を発声するのに似ている。

声の場合は声帯で発生したわずかな振動を鼻孔や頭骨や胸部の空洞で共鳴させ音圧を調節するが、石の場合は全身の毛細血管を使い波動の強さを調節する。

それだけの違いだ。

声の大きさや石の力を引き出す能力は体格の良し悪しとは関係がない。

天分による所が大きいのだ。

遠くまで声を届けるためには喉の筋力が強い大男がなりたてるよりも、お腹を空かせた赤子が母を呼ぶために全身を使って発声する方が勝ると同じようなものだ。

そして大きすぎる声は喉を破壊する。

オレはリシリが耐えられるよう様子を見ながら徐々に石の共鳴を強めていく。

「あ、マスター」

リシリは小さく声を漏らして、左胸に刺さったプラグを押さえながら弱々しい視線をオレに向けた。

オレはリシリの瞳孔の色が変化する様子に注意を払った。

これ以上の増幅は必要ないだろう。

オレは精製機のゲージに目を移し、少しもうろうつとした意識の中で、お互いのプラグをはずし血清の精製に取り掛かった。

「先に中和剤を飲んでおけ」

オレは噴射式の注射器にカートリッジをセットし、眠っているネズミの腹にあてがった。

「マ・スター……、おつかれ・さま……」

リシリが息を切らせながら言った。

「わたし……どうでしたか？」

リシリの白く濁った瞳孔は、少しずつ黒く戻り始めていた。

「ああ、よくがんばったな」

オレはいつもより少しだけやさしくリシリに微笑みかけた。

リシリに安堵の表情がうかんだ。

リシリの体に掛かる負担はオレとは比較にならないだろう。

彼女は石使いとしての才能こそあったが、まだ経験が足りなかった。

「素敵。あなた達のnext本当に美しかった」

麻耶がこつちに近づいてきた。

「こんなに息の合ったnext初めてみるわ。なんだか少し妬けるわね」

「麻耶さん、そんなこと言わないで。恥ずかしいよ」

意識のハッキリしたリシリが頬を赤らめた。

「うふふ。だって本当の事だもの。首都に着いたら私もあなた達に合わせたい人がいるのよ。わたしの、パー・ト・ナー。見てみたいでしょ？」

リシリが目をまん丸にした。

「え！ 麻耶さんにも直結できるパートナーがいるんですか？」

「ええ、彼とは今nextの練習をしてるのよ。着いたらみんなで食事にでも行きましょうか」

「麻耶さんのパートナーか、どんな人ですか？ 教えてくださいよ。ねえ麻耶さん」

「それは、着いてからのお楽しみ」

オレ達はネズミの気配の消えた森を東に向かって歩き始めた。

石使いはただでさえ人数が少ない。

その上、血流を直結できるようなパートナーにめぐり合えるのは非常に稀なことだ。

石使いとして修行中の麻耶に既にパートナーが居ることを知って、オレは内心少し動揺していた。

ゆうちゃん

首都に着くと麻耶はさっそくパートナーに連絡をとった。

それからしばらくすると麻耶の携帯から返信音が聞こえた。

「私チヨット彼の所に行つてくるから、後でどこかのお店で待ち合わせしましょ」

操作していた携帯を閉じながら麻耶が言った。

「じゃあ、中央広場のバイキング屋台街でいいか？」

オレは首都の地理に詳しくかった。

「うん、じゃあそこで」

麻耶は小走りに立ち去っていった。

首都中心部には田舎ではあまり見かけない個性的で楽しいお店が多い。

夕食までの時間を潰すのに苦労はしないだろう。

「ねえ、最初はどこのお店を見る？」

リシリはすでに興奮状態になっているようだった。

中央広場は夕食時になると屋台を訪れる客でごった返す。

貧困層が増えた現在では人々の娯楽の中心は食べるようになっていくからだ。

オレはC-2付近のテーブルを陣取ると軽食を買ってくるようリシリにたのんだ。

「オレ場所取りしとくから、ギムレットとツマミになるような物を買ってきてくれ」

「もうお酒飲むの？」

リシリが不満そうに答えた。

「うん、まあね。リシリも好きなもの買ってこいよ。お腹が膨らまない程度にな」

リシリは唇を尖らせながら立ち去った。

術式中とはまるで別人のようだ。

しばらくするとリシリがお好み焼きのようなものとタコスのようなものを抱えて帰ってきた。

もちろんギムレットも忘れていなかった。

オレ達が首都のお店の話で盛り上がっていると携帯のメール音が鳴った。

「麻耶達、今から来るってさ」

返信メールを送りながらオレは言った。

数刻すると遠くからこつちに歩いてくる二人組みが目についた。

一人は麻耶と、もう一人はオレには見覚えのある人物だった。

「あれ？ デュート？ タワシ頭のデュートでしょ？」

二人が近くまで来ると、麻耶よりも先に麻耶のパートナーがオレに声を掛けてきた。

「あらゝ久しぶりゝ。あなた全然変わらないわね。ずっと連絡くれなかったから、どうしちゃったのかと思ってたのよゝ」

彼？ は雄二。オレの石使い養成学校時代の同級生だ。

「よう、久しぶり。ゆうじも相変わらずだな。元気にしてたか？」

「もう、ゆうじはやめてって言ってるじゃない。ゆうちゃん。私のことはゆうちゃんって呼んでよゝ」

学生時代の雄二はなかなか成績がよく、オレはヤツよりも学年順位が上になったことが無い。

卒業してから10年以上経つが、彼に会うのは卒業式以来だった。

「二人ともお知り合い？」

麻耶が尋ねた。

「お知り合いもなにも、私たち同・級・生。一緒に青春を謳歌した仲なのよゝ」

言ってる事は正しいが何か不に落ちない。

「あら、そちらのお嬢さんは？」

リシリは突然話を振られてあせっているようだ。

「あ、え」と、私は、石使い（マスター）の管理シヤドウ者です」

「あら、可愛らしいシヤドウさん。タワシ頭のデュートといつも一緒で大変ねえ」

余計なお世話だ。

「じゃあ、旧友との再会を祝って乾杯ね？」

麻耶は手に提げていた料理盛り合わせをテーブルに並べ、ワインとブドウジュースを皆に注ぎはじめた。

麻耶のパートナーが雄二であることを知って、オレは何故か少しほっとしていた。

屋台の食べ物値段の割りにおいしい。

オレはつかの間の幸福を味わった。

貴石研究所 1

首都には様々な重要施設が集中している。

今から50年前、民間企業や政府は主要施設を地方ではなく首都に置いた。

組織間でのやり取りが行いやすいからだ。

現在は町同士の交流は難しくなっている。

そのため首都に組織の中核機能が集中するというこの傾向はますます強くなっている。

貴石研究所もまたそんな首都に建てられた施設の一つだ。

麻耶と雄二は、民間では最大規模と言われているこの鉱石研究施設で働いていた。

研究には多額の資金が必要になるのだろう。

民間企業である貴石研究所は、資金を集めるために宝飾品の生産や原石の加工など石に関わる業務を幅広く手掛けていた。

アクセサリーに敏感な『ゆうちゃん』は社員割引で買ったそれらをいくつも身に付けていた。

オレは思う、同じアクセサリーならリシリが身に着けた方が宝石達は喜ぶのではないかと。

とはいっても、リシリはまだ高価な宝飾品が似合うほど大人ではないのだが。

貴石研究所の5階には実験を行うための部屋がある。

オレ達4人はこの部屋に案内された。

「ごくろうじやったのう麻耶、よくぞ手に入れて来てくれた」

部屋に入ると白髪に白衣の老人が目細めながら話しかけてきた。

彼は鉱石研究部門の責任者らしい。

「これで研究が再開できますね！ 博士！」

麻耶が今までに見せた事の無い笑顔を博士に向けた。

麻耶は鉱石を手に入れるためにオレ達の住む町へやってきていたのだ。

彼女が苦勞の末手に入れた鉱石は、新しい技術の研究にはかかせないものらしい。

オレ達は麻耶が行う新しい実験に立ち会いを許された。

「はてさて、今度はうまくいくかのう」

博士は実験用のラットを運んできてケースごとテーブルの上においた。

麻耶は手に入れた鉱石から石粉を作ると博士に確認した。

「博士、いいですか？」

「うむ、始めたまえ」

彼女はラットの傍らのイスに腰掛け、左胸にプラグを挿し石粉を飲み込んだ。

麻耶は静かに眼を閉じ、石の力を引き出すため精神を集中させ始めた。

博士はケースから麻醉で眠らせたラットを取り出すとそれを机の上に乗せた。

机の端には医療器具が並んでいる。

博士はそこからメスを取りラットの腹を割くと、露出した臓器の一部に小さくキズをつけた。

「どうだい麻耶、できそうかい？」

麻耶は目を開け精製機のゲージに目をやった。

「いきます」

麻耶は立ち上がり、自らの心臓を通して出来上がった血清を慎重にラットに注射した。

しばらくするとラットの臓器から流れ出ていた血が止まったように見えた。

博士はメスで割いた腹を指で合わせた。

傷口を塞ぐのであればこの合わせ目を糸で縫い合わせるのが普通

であるが、博士はそうはしなかった。

数分後博士はラットの腹から指を離した。

しかし、本来再び割けるはずの傷口は閉じたままとなっている。まるで縫合してから二、三日が経過したかのような傷口だ。

「麻耶見えるかい？ 成功じゃよ」

麻耶の瞳が潤んだ。

「博士、博士」

「お前の諦めない心がこの結果を生んだのじゃ。石の力をかりた細胞の修復、これで多くの命が救われるじやろう」

その時足元から巨大な爆発音が聞こえ、同時に建物が激しく上下に振動した。

スチール製のタナは倒れ破裂音が耳を刺激する。

蛍光灯はチカチカと点滅し、一瞬の暗闇の後非常灯が白かった壁をオレンジ色に染めた。

貴石研究所 2

階の下の方からは人々の悲鳴や罵声がスプリンクラーの放水音と混ざり合い、歓声にも似た騒音となって上まで響いてきた。

数刻後スピーカーから放送が流れた。

「ただいま1階ロビーで爆発がありました。

現在状況を調査中ですので、フロア全体が立ち入り禁止となっております。

その場で待機したまま次の連絡をお待ちください。

なお、このビルは倒壊する危険はありません。

繰り返します……」

テープでも流しているかの様な落ち着いた口調だ。

これだけの組織になると、なるほどよく災害時の心理学を心得ているのだろう。

しばらくすると再び放送が流れた。

「ただいま1階ロビーは瓦礫^{がれき}の撤去作業を行っております。

通行できるようになるまで、今しばらくそのままお待ちください」

「私行ってくる！」

麻耶が医療器具をまとめ始めた。

あれだけの爆発だ、1階には多くの怪我人が発生しているに違いない。

「マスター？」

リシリが不安そうにオレの顔を見た。

麻耶達がロビーに向けて出発するとオレ達もその後を追いかけた。非常階段を下りロビーに出ると、天井には黒い煙が充満し、床には瓦礫と人間が散乱していた。

麻耶は医者だ。

患者の状態を次々に把握していく。

軽傷者の場合付近の健常者へ指示を出して患者を引継ぎ、重傷者の場合最低限の応急処置を施したあと引き継ぎをする。

オレはできる範囲で彼女のサポートをした。

全ての患者の処置が終わったと思ったその時、雄二は倒れた石柱の近くで声を上げる。

「こっちにもいるわよ」

駆け寄るとたしかに柱の影に人が見えた。

「デュート、そっち持ってちょうだい」

オレ達は患者の上に乗っている落下した天板をどかした。赤黒い血が体の下で溜まりを作っていた。

麻耶は膝をつき患者の服を切ると損傷箇所をしらべた。

「やるしかない」

麻耶は変色した患者の顔を見て言った。

何かを思いつめたような表情だ。

「私が医者を目指したのは父さんの死がキツカケだった」

麻耶が語り始めた。

「あの時何もできなかった私は父さんに約束した。

『私は医者になって人の命を救えるようになります』、と」

彼女はバックに手を伸ばし器具を準備し始める。

「でも運命は皮肉ね。

医者になった私は、それまでよりも多くの死を見るようになった。

そして、患者が死ぬ度に私は心の中で父さんに謝った。

『また約束を守れませんでした』と、

私は、私の前では一人も死なせたくない。

あの時、私は父さんにそう約束したから……」

麻耶は先ほどの実験に使っていた石粉を取り出した。

「外科的処置にはやれる事に限界があるわ。

私はそれが許せなくて石使いを目指した。

当時研究が始まった石の修復効果を外科的手術に応用するために」

麻耶は患者の全身に目を移す。

「この人はもう外科的処置だけでは救えない。
でも、このレッドダイヤモンドの力を借りれば助けられるかもしれない。」

いえ、助けてみせる」

麻耶の語気が強まった。

「今こそ父さんへの誓いを果たす時。

私は、もうこれ以上誰も死なせない！」

麻耶が力強くメスを握った。

「麻耶、お前は強い」

遅れてきた博士が麻耶の横にヒザをつき、やさしく話し始めた。

「修復の技術は破壊の技術よりもはるかに習得が難しい。

お前はあえてその修復の道を選んだ。

困難を承知でな。

だからお前は強い。

どんな試練があろうとお前は必ずそれを乗り越えるじやろう」

博士が麻耶のサポートに就く。

「さあ、一つ目の奇跡をワシに見せておくれ」

麻耶が見せた決意と行動力は、オレの心に変化をもたらした。

告発

今から数年前、オレは政府の鉱石研究チームで働いていた。

いや、sh-32型への抗体を持つていたオレは、『働かされていた』といった方が正しいのかもしれない。

イブラヒムはその研究チームのリーダーだった。

能力のある男だったが、彼は独自の思想を持っていた。

民主主義の盲信。

彼の主張はこうだ。

「旧時代の不の遺産である独裁国家や神権政治国、それらは今すぐ民主主義に体制を変えるべきである」

オレにとっちゃあそんな事はどうでもいい。

独裁だろつが選挙だろつが、権力を持つちまえば人はどうせすぐに墮落する。

民主政治に変わる新しい政治体制の誕生、そんな人類史を変えるような発明でもされないかぎり状況は何も変わらないだろう。

しかし、オレはイブラヒムがしている事で一つだけ気に入らない事があつた。

ヤツは独裁国家の反体制組織に細菌の技術を横流ししていたのだ。立場上最先端の細菌技術に関わっているオレ達は、その気になればその情報を外部に漏らすことができる。

ヤツは自分の思想を実現するためにそれを行っていた。

細菌を殺すために研究をしているオレ達が、細菌をばら撒く手伝いをする。

笑えないジョークだ。

オレはヤツを告発することにした。

しかし、イブラヒムは頭のいい男だ。

ヤツを貶めいれようとしたオレは逆にヤツにハメられてしまった。

チームを辞めざるを得なくなったオレは首都に居ずくなり、やがてアイツと田舎で隠居生活を送ろうと思うようになった。アイツと一緒に居られる事がオレにとっては全てだった。

あれから数年、久しぶりに首都に戻ったオレを待っていたのはテロという名の宣伝活動だった。

あの貴石研究所爆破事件は、田舎で隠居生活を送ろうと思っていたオレの心に大きな気持の変化をもたらした。

オレは失っていた物を思い出した。

麻耶の目だ。

自分の信念に命を掛ける。

オレはあの目を取り戻したいと思った。

いくら自然が好きだからって、盆栽をいじって満足するには早すぎる。

おれは、ヤツ、イブラヒムを告発するために再び戦うことにした。リシリはいつも前向きなアドバイスをオレにしてくれる。

雄二はお調子者だが案外切れ者だ。

そして天国と地獄を併せ呑む才女麻耶。

あの時とは違う。

オレは一人じゃない。

イブラヒムのリークの証拠を集めるため、オレ達は国立鉾石研究所に向かった。

潜入

人生つてのはまったく不思議なものだ。

数年前までは抜け出したいと思っていた建物に、今度は入る為に苦勞しなくちゃあならない。

それも、水浴びの為に夜の学校のプールに忍び込むのとは訳が違う。

見つかつたらオレ達は犯罪者だ。

そうなる前に証拠を手に入れなければならない。

しかし、雄二にはどうもその緊張感が感じられない。

「どう『タワシ』、作戦はうまくいきそう?」

まるでピクニックに行く時のようだ。

そしてあだ名が『タワシ頭』から『タワシ』に変わっていた。

「お前がへましなけりやな」

「アンタって本当に×。×。×。×!」

雄二には下品な言葉がよく似合う。

月見草がよく似合う富士山とはえらい違いだ。

「さ、行こうぜ。この時間なら受付の警備員は一人だ」

雄二のヒステリーに付き合っているヒマはない。

オレは麻酔弾の入ったライフルの安全装置をはずし入り口へ向かった。

ドンドン

開かない自動ドアをリシリがノックする。

片手にはお弁当袋。

時間はまだ夜の8時、ドロボーが活動をはじめには早すぎる。

油断した警備員が眉毛をハの字にしながらドアを開けた。

カウボーイの出番だ。

お昼寝を始めた警備員を物陰に隠し、オレは社員カードを抜き取

った。

「資料室はこっちだ」

オレは腕で合図する。

目をつぶっていてもたどり着けるだろう。

数年前までは、ここで過ごす時間の方が自分の部屋で過ごす時間より長かったのだ。

ドアのロックはスループスだ。

なにせ、オレ達はさっきこの警備員になったばかりだ。

雄二に至ってはコスプレまでしている。

しかし、なぜコイツはそんな物をもっているのか。

……想像したくないな。

オレ達は資料室の前にたどり着いた。

ここは会社の頭脳だ。簡単には入れない。

警備員のカードも暗証番号の入力が求められる。

ハッキングをして開けるしかない。

雄二は先頭に立ちこっちを向き直ると両腕を広げた。

「みんな！ 安心して」

雄二がやるとなんでこんなに演技掛かって見えるのだろう。

「ここは私にまかせてちょうだい！ こんな扉、私にかかればチョ

ロイもんよ」

その為に関連してきたのだ。

「私のハッキング技術は……。つまり……」。

……… という訳で、私ってとってもスゴイのよ！！」

長い自慢話は誰も聞かない。

これは万国共通だ。

せっかくやってる事はスゴイのに、雄二は尊敬を集める唯一のチヤンスを無駄にした。

影

資料室に入ったオレ達は証拠の引き出しに取り掛かった。PCの操作を始めてみたが、どうも様子がおかしい。核心に近づこうとすると、ことごとくロックが発生する。オレの脳裏に嫌な予感がよぎる。

「雄二、ロックを解除できそうか？」

「分からない、でもどちらにしても時間が掛かるわよ」

その時、部屋のカベ際で何かが動く気配がした。

「なんだ？」

音の聞こえた方へ注意を向ける。

小さな何かが机の下へ移動したように見えた。

「ネズミよ！」

麻耶が一点を見つめたまま顔を強張らせる。

「まさか……」

この資料室にネズミが紛れ込むなどありえない。

しかしそのネズミがいる。

オレはネズミの背後にいるであろう人物の名前をつぶやく。

「イブラヒムだ。ヤツがオレ達の動きに気づいたのかもしれない」

イブラヒムは用心深い男だ。

オレ達が首都に戻ったのを知ったら、秘密を守る為に何かの策を用意してもおかしくない。

だとすると、このネズミは……

『保菌者』

オレは麻酔銃を構える。

「キャッ」

「リシリが悲鳴を上げる。」

視線の先には無数のネズミが黒い固まりになっていた。

なぜこんな所にこれほどの数のネズミがいるのか。
理由はひとつ。

イブラヒムはこの研究所の最高責任者だ。

ヤツならばここにワナを仕掛けるなど造作もないだろう。

オレは偵察ネズミに向けて麻醉銃を撃った。

「リシリ『next』だ！」

「はいっ」

リシリが機材を持ってこっちへくる。

急がなければならない。

どこから集まっているのか、黒い固まりはどんどん大きさを増している。

「いくぞ！ リシリ」

オレとリシリは石粉を飲み込み心臓同士を結合する。

リシリは落ち着いている。

彼女のやさしい血脈がオレに流れ込んでくる。

リシリにはまだ余裕があるようだ。

やがて、出来上がった血清をオレはネズミに注射する。

「どうだ！」

えもいわれぬ不安がオレの頭をよぎる。

イブラヒムが「next」を知らないはずがない。

だとすると……

嫌な予感が的中した。

ネズミの皮膚に変化がない。

これはネズミが菌に感染していることを意味する。

それも『sh-32型』以外の菌に。

黒い固まりがザワザワと動き始めた。

おそらく狩りを始めるつもりだろう。

オレ達の狩りを……

繊細な駆け引き

「雄二『sh系細菌』に関する最新情報にアクセスしてくれ！」

ここは資料室、ヤツが新しい菌を使っているとしたら、その情報が見つかるかもしれない。

「もうやってる！ 少し時間を稼いでちょうだい」

黒い固まりは徐々にオレ達の居場所を奪っていく。

リシリと麻耶はイスでネズミ達を威嚇しはじめた。

オレは無駄だと分かっているながらも、ロックが掛かっているであろう扉へ走った。

警備員用のカードを通し先ほどハックしたパスワードを入力する。カードリーダーの横のランプが赤く点灯し扉には変化がない。

「くっ やはりか」

オレは少し下がり、助走をつけて扉に体当たりをした。

鈍い音が部屋に響き渡るだけで、やはり扉には変化がない。

「イッ！」

「リシリ！ 大丈夫？」

リシリがネズミに噛まれたようだ。

よく見ると、そう言っている麻耶もネズミにとり付かれ始めている。

敵は数が多い。

一匹や二匹振り払ったところで身を守り通すのは難しい。

「雄二！ なにか見つかったか！」

雄二の情報調査に望みをかける。

「sh-32に進化系が見つかったらしいわ！
特徴を読むわよ。」

『sh-32-type B』この細菌は微弱ではあるがエメラルドへの抵抗力を持つ。

血清の投与による殺菌効果は依然として有効だが、感染したネズ

「三への『next』は効果を発揮しない」

「つまりこういうことか？」

「オレは今の状況に当てはめる。」

「オレ達は菌では死なないが、ネズミ達に食い殺される」

「オレは一つの作戦を試みることにした。」

「雄二、オレとリシリを援護してくれ。ネズミを近づけるな。」

「リシリ！ もう一度『next』をやるぞ！」

「マスター」

「あんた聞いてなかったの！？ このネズミ達はtype-Bに感染してるのよ。『next』は効かないの！」

「雄二の言いたいことは分かったが、オレはこれに掛けるしかなかった。」

「オレを信じてくれ」

「オレは『next』の準備にとりかかった。」

「この菌は血清に対して微弱な抵抗力を持っている。」

「菌自らは死滅するが保菌者の細胞までは破壊されないことでそれは分かる。」

「ならば、血清の効力をもっと強力にしたらどうだろう。」

「石の効力を通常より多く増幅させるのだ。」

「石の力の増幅は調整できる。」

「ただし、リシリの体がそれに耐えられるかどうかが問題だ。」

「限界ギリギリのところで作った血清が、type Bに感染したネズミにどこまで通用するか。」

「その繊細な術式にオレは命運を掛けることにした。」

「マスター、私やります！」

「リシリに迷いはない。」

「命を差し出せと言えば差し出すかもしれない。」

「リシリはそういう女だ。」

「麻耶！ 『type-B』を無力化させるのには血清の強度がどの程度必要か計算してくれ。」

サンプルなら、床に嫌ってほどいるからな」

きつ過ぎる冗談は麻耶に通じなかった。

オレはリシリと心臓を直結し話しかける。

「リシリ……いつもありがとう……」

この『next』が通用しなければオレ達に命はない。

これが最後の接続になるかもしれないと思うと、プラグを差す手が自然とやさしくなった。

懐かしいほほ笑み

「出たわよ。820mol。この数値を上回れば理論上ではいけるはず」

伝えると、麻耶はネズミへの応戦にもどった。雄二もだいぶケガを負っている。

これ以上ネズミ達に対抗するのが難しくなってきた。

この『next』を成功させることがオレ達の最後の望みだ。

オレはリシリの頬に手を沿え、こつちを見るように促した。

石粉による変化が出始めている。

美しかった漆黒の瞳孔が白く濁り始めた。

「リシリ、すまない」

オレの心の中で罪悪感が膨れ上がる。

やがて精製機のゲージは750molまで上昇した。

しかし、まだ必要値までは足りない。

リシリからはもう限界の様子が見てとれる。

「マスター……わたし……まだやれます……」

リシリは完全に白く濁った瞳でこつちを見る。

命を失った生物。

リシリは同じ目の色をしている。

おそらく意識を保つのも困難な状態だろう。

「無理だ、これ以上は。他の手を考えよう」

石の力をこれ以上強めれば、リシリの肉体は許容の限界を超えてしまう。

そうなった時、リシリがどれほど悲惨な姿になってしまうのか。オレは知っている。

今から5年前。

アイツは、オレの目の前で限界をこえてしまった。

強烈な記憶は風化することがない。

まるで昨日のことにようにオレの脳裏から蘇る。

あの時、彼女の体は石の力に耐えられなくなり、みるみるその姿を変えていった。

大好きだった笑顔も、やさしかった腕も。

その全てが変わっていった。

目を覆うような姿に変わっていく彼女を見ながら、オレはただ彼女と同じ姿になることを望んだ。

同じ姿になれば彼女を救えるような錯覚をしていたのかもしれない。

周りにある全ての薬品を飲み込んだが体には異常は現れない。

『なぜ彼女だけがこんな姿にならなければならぬんだ』

オレは自分の能力を、そして未熟だった自分自身を呪った。

それからオレは考えた。

姿をなくしてしまった彼女の、心だけでもなんとか残せないだろうか。

あれ以来、オレは自分で何かを考えることをやめた。

彼女の声で動くことにした。

そうすることで、あいつはオレの心の中で生き続けることができると思ったからだ。

「同じ過ちは繰り返せない……」

自然と言葉が出た。

「お願い、マスター！ もっと力を！ このままじゃみんなが死んじゃう」

オレには分かっている。

これ以上の力を増幅すればリシリの存在自体がなくなってしまう。リシリが必死に叫んでも、オレにはもう声が届いていない。

麻耶はネズミに抵抗するのをやめた。

力なくこつちを振り向いた後、血で汚れた顔をぬぐいながら言っ

た。

「ここまでね。覚悟を決めましょう」

「麻耶さんまでそんなこと。諦めないでください。私、まだ死にたくない！」

最後の方はリシリに似合わないほどの強い口調だった。

「死にたくない？　そうか、リシリは死にたくないのか」

いつ死んでもかまわないと思っていたオレは、リシリの言葉が不思議に感じた。

リシリは生きようとしている。

生きることを勝手にあきらめてしまうのはオレのエゴなのかもしれない。

そう思った。

彼女が助かるために、オレには何ができるだろう。

アイツだったら……

オレに何ていうだろうか……

その時、彼女の声ではなく彼女自身がそこに見えた。まるでリシリを守るかのように重なっている。

「リシリはわたしにまかせて」

彼女のやさしいほほ笑み。

あの頃と少しも変わっていない。

オレに勇気を与えてくれた。

リシリも同じようにほほ笑んでいる。

「私、これからもずっとマスターと一緒にいたい」

暖かく見つめるリシリと彼女、オレは心を決めた。

「リシリ、もう一度だ！」

証

どんな結果になろうと受け入れよう。

これは彼女の声を聴いて、オレが自分で選んだ運命だ。
そう、あの時と同じ。

おれは心の中で彼女にささやく。

『お願いだ。リシリを守ってくれ』

『next』を続けたオレは、徐々に石の効力を増幅していく。

オレはリシリの心臓に埋め込まれた端子に目を移した。

リシリの左胸の端子周辺からはかなりの量の血が流れ出していた。
それは体を伝って床に流れ出し、赤黒い河を作り始めている。
接続されている血管に穴が開いたのか。

それとも、心臓自体にダメージがあるのだろうか。

ゲージに目を移した。

数値は800。

必要値まであと20mol。

さらに拡張を強めなければならない。

リシリの怪我の症状はさらに悪化するだろう。

そう思うと、オレはもう彼女の左胸を見られなかった。

ゲージを820に合わせる。

そのことだけに集中した。

今オレにできるのはそれだけからだ。

目が霞んできた。

体全体が、痺れの状態から激痛を感じる状態へと変わっている。

オレは麻耶を呼んだ。

「麻耶……頼む……」

薄れゆく意識のなかで麻耶が手を動かしているのが見えた。

ゲージが820を超えたのだろう。

ふと目覚めたオレは自分が意識を失っていたことに気がついた。
ぼんやりとしたまま周囲の状況を確認する。

血を流したリシリがまだ隣に居た。

あれからそれほどの時間は経っていないようだ。

その傍らでは医療器具を広げた麻耶と雄二が話をしている。
かたわ

「再生は？ レッドダイヤを使っても無理なの？」

「無理よ。レッドダイヤは細胞を修復するだけ。無いものを作り出すことはできない」

どうやらネズミ達を退散させるのには成功したようだが、リシリの体には大きなダメージがあるらしい。

オレは首を寝かせたまま二人に話しかけた。

「リシリは、大丈夫か」

「気がついたのね。リシリは……」

麻耶が少しためらいながらうつづけた。

「リシリは、残念だけど……」

それ以上聞きたくなかった。

オレの中で悲しみがこみ上げる。

「残念ていうのはどういうことだよ！ リシリは最後まであきらめなかった。まだ終わっていないんだろ？」

オレは彼女の言葉をさえぎった。

「無理なのよ！ リシリの心臓はダメージが大きすぎる！ 私だつてリシリを救いたいわ。でも、もう無理なのよ！」

「心臓が壊れちまったんなら、使えるものに交換すればいい」

「どんなことをしてもリシリを救いたかった。」

「なに言ってるのよ、できればとづくにやってるわ」

オレは麻耶に諭す。
さと

「できるはずだろ？ お前は医者だ。移植くらいできなきゃ医者とは呼べないからな」

少し間を置いて麻耶が答える。

「移植………」

オレはつづけた。

「いるだろ。ここにドナーが。心臓でも肺でも、必要なものは、オレのを全部使ってくれ！」

麻耶の目が真剣になった。

「本気で言っているの？」

「どうせオレももう助からない。自分で分かるくらいだ。医者のお前ならなおさら分かるだろ？　だったら使える部分を使ってどっちかが生き残った方がいい」

オレは説明をつづける。

「ドナーとしての相性は最高のはずだろ？　だって、こいつはオレの管理者だからな」

「……………」

「いいだろ麻耶？　リシリには未来がある。だから、オレは最後にリシリに託したいんだ。オレが生きたっていう証を」

これでいいんだ。

オレの体がリシリが生きるための役に立つのなら、全部やっちゃまえばいい。

そうすることで、オレは過去の罪を償えるとも思った。

そして、オレはあいつに伝えた。

『待たせたな。これからお前のところへ行くよ』

死を覚悟したオレはあいつとの過去を思い出す。

彼女と過ごした幸せだった日々。

楽しかったことや嫌だったこと。

今思うと嫌だったことも笑い話の一つだ。

『これからもずっと一緒にいよう』

オレは心の中で彼女に語りかけた。

麻耶がメスを握りオレの方へ体を向ける。

麻耶も覚悟を決めたようだ。

彼女の目が潤んでいるように見えた。

そんな目じゃあ手元が狂うかもしれない。

そう思ったオレは彼女の目を拭ってあげようと思った。

手を伸ばせば届く距離にいるのに触れることができない。

オレの腕はもう動かなくなっていたからだ。

左胸のプラグからはリシリと同じように血が流れだしている。

出血のせいだろう、眠くなってきたのでオレは目を閉じることにした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5564x/>

RED DIAMOND

2011年10月27日13時02分発行